



おかやま環境ネットワーク NEWS

NO.103
2026.3

【発行】公益財団法人
おかやま環境ネットワーク

おかやまの豊かな自然とくらしを考える部会 連続学習会「今、岡山に自然史博物館を～自然の再生を考える～」開催報告

おかやまの豊かな自然とくらしを考える部会（略：自然とくらし部会）では、2024年度に引き続き、岡山県内外の自然史博物館の視察とともに、自然史博物館の意義を市民と共に学ぶ場として4回の連続学習会を開催しました。各講師には、自然史に関連した情報提供とともに、講師が考える自然史博物館の意義について話題提供をお願いし、各回最後の総合討論では参加者を交えた意見交流を行ないました。

【開催趣旨】

今、岡山県でも生物多様性が急速に失われています。ふるさと岡山の生き物や自然は県民共通の財産であり、これまで採取された標本や地域の自然情報を残し、未来に引き継ぐことが急務となっています。

2022年、弊財団は「おかやまの豊かな自然とくらしを考える部会（略：自然とくらし部会）」を設置しました。2024年度は、専門家の皆さんと市民が同じ目線で、ふるさとの自然を未来のまちづくりに生かしていく拠点ともなる自然史博物館の意義を学び、設置の必要性について考える機会として、3回連続の学習会を開催致しました。2025年度も引き続き4回の連続学習会を計画致します。岡山の豊かな自然とくらしを残していきたいと考える多くの皆様の参加をお待ちしています。

◆ **日時：2025年10月26日(日)**
13時～16時
◆ **参加人数：24名**

◆ **講師1：早川 宗志氏**
(ふじのくに地球環境史ミュージアム
学芸課准教授：植物分類学)
演題「ふじのくに地球環境史ミュージアム
の取り組みと収集保管活動」

◇ 講演概要

活動テーマ
「百年後の静岡が豊かであるために」
(どうすればいいの?)

▼

ミュージアムが伝えたいこと
どうすれば百年後まで豊かな静岡が
つながるか『考えていこう』

ふじのくに地球環境史ミュージアムは、2016（平

成28）年3月26日に開館した静岡県立として初の自然系博物館である。2013（平成25）年3月に閉校となった高校校舎をリノベーションした建物を再活用していることから、展示室や収蔵室、研究室はすべてかつての一般教室や特別教室で、学習机や椅子、黒板などの学校什器を活用した展示室では、かつての学び舎の空気が随所に漂っている。

当館の開館に先立ち、静岡県では、消失や散逸が懸念される静岡県内の貴重な自然史標本の保存と次世代への継承を目的として、自然史資料の収集と登録作業を実施してきた。実際の作業は、NPO法人静岡県自然史博物館ネットワークへの業務委託により、2003（平成15）年10月から登録整理作業を開始した。これが、現在へと続く当館の収集保管体制の土台となっている。

現在、当館の所蔵標本は100万点に達する。50万点を超える昆虫標本（チョウ類が30万点越）、26万点の維管束植物などにより構成される。

ふじのくに地球環境史ミュージアムの維管束植物の収蔵庫。一部標本は寄贈者が用いていた茶箱で収蔵している。

維管束植物16万点の採集者属性を解析した結果、

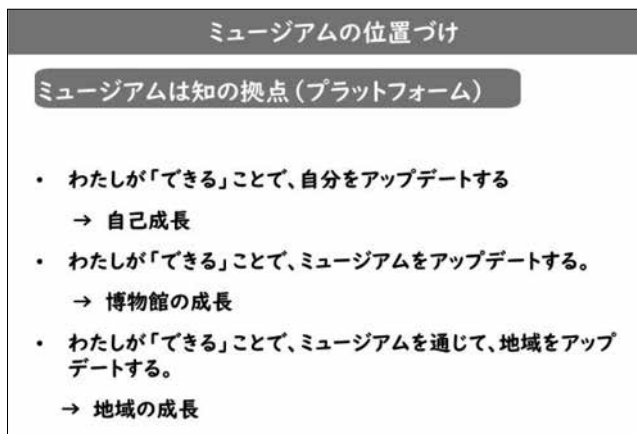
第二次世界大戦終結前にあたる1945年以前の標本は2千点であった。1945年以前の標本点数が少ない理由は、『静岡県植物誌』の執筆者である杉本順一氏が戦前に採集した約30万点の標本が静岡大空襲（1945年6月19日夜半から20日）により焼失したことが大きい。また、戦前標本2千点の大半は、静岡県立清水東高等学校に所蔵されていた標本(学校標本)の移管品である。



静岡県を対象とした植物研究を長年にわたり実施されてきた3名のコレクションが主体であることから、近年の採集標本は少なかった。標本採集者が少なくなっている現状は、地域の自然史の経年変化を把握する上で大きな懸念材料である。「絶滅危惧種が絶滅する前に、絶滅危惧種の調査をできる人が絶滅する」という話は生物調査者の自虐であるが、生物調査者の年齢構成が年々高くなっている現状を物語っている。

標本を活用した地域の自然史研究は、過去の標本が採集・収集・保管されてきたからこそ実施することが可能となる。NPO法人静岡県自然史博物館ネットワークをはじめとした方々の惜しみない情熱と支援によって静岡県の自然史研究と収集保管活動は支えられてきている。

また学校標本に関して、静岡県内の高等学校を調査したところ、トキ（静岡県立磐田南高校）やライチョウ（静岡県立清水東高校）など貴重な剥製標本などが所蔵されていた。貴重な標本のみならず戦前の身近な生き物など、現在では再採集不可能な標本群が過去を明らかにできるタイムカプセルとして眠っているこ



とがある。

◆講師2：谷地森 秀二氏

(高知に自然史博物館をつくる会代表)

演題「高知県に県立自然史博物館ができることを目指して」

◇講演概要

近い将来、高知県産の自然史科学標本、特に生物標本の行先を模索する事態がやって来る。これらの多くは個人収集標本で、現在の高知県の生物標本保管施設と体制の状況からみると、高知県外へ流出する可能性が極めて高い。

残念だけど、高知県には
多くの生きものを対象とし、
県全域を対象とした
県立博物館がない。

そのために、
これまでの自然の記録が
県内に残せず、消失したり、
県外へ流出したりしている。

そこで私も参加しているこうちミュージアムネットワークでは、現在高知県内にどのような自然史科学標本があるのか、その量や保管管理の状況はどうなっているのか、今後どの程度の期間現状を維持できるのかの調査が令和3年度に行った。調査の結果、高知県には様々な生物標本を所有の個人・団体が69件あった。その方々が所有の標本を、生物分野別に整理してみたところ、そのコレクション数は132件（約235,000点）あることが分かった。所有者の方に現状のまま維持できる期間について尋ねると、10年以上維持できるという回答が48件（約16万点）、10年以内に維持できなくなるとの回答が11件（7万点以上）、さらに5年以内にどうなるかわからないとの回答が6件寄せられた。

維持できなく理由は、所有者の高齢化、保管場所の維持が困難、容器の劣化、適切な保管管理知識を有する人材不足等。「博物館活動に協力する意思があるか？」については、個人所有の人々の多くが、高知県に収蔵施設を有する自然史博物館ができることを希望されていた。そして、「高知県が県立自然史博物館的な施設を設置した場合の協力の意思の有無」については、多様な生物分野の標本が寄贈、寄託および随時貸出などで多くの方から協力が見込まれることもわかった。

これらのことから、高知県に現存する生物標本を受け入れ、永続的に保管管理して、後世に伝えるとともに、その時々の高知県の自然環境に興味を持つ研究者を含む多くの人に利用できる体制を備えた県立自然史

四国の野生生物を調査・研究し、
得られた成果を用いて、
人といきものとの共存の方法を
考える。

知見と標本を保存し、
後世に伝える。

自然史博物館的活動を展開する。

博物館の設置を高知県へ働きかけることを目的に、「高知に自然史博物館をつくる会」を令和6年5月1日に設立した。

現在、高知県内に存在する自然史科学標本を使って活動する県立自然史博物館設立に対する民意を把握するとともに、現在県内に存在する生物標本の一時保管場所を探す活動を展開している。民意を把握するために、高知県に必要と考える自然史博物館の具体的なイメージ資料を作成した。そして作成したイメージ資料を用いて、高知県の自然の変遷の証拠である標本を残すためには、このような施設が必要であることを伝え、アンケート調査を令和7年1月1日より開始している。

高知に自然史博物館をつくる会

令和6年5月1日設立
須崎市に事務所を置く任意団体

高知県の自然史科学情報の記録を標本とともに保存し、未来へ継承するための施設である自然史博物館を設立することを目的とする。

標本保管場所としては、旧須崎高等学校の教室が利用できそうか8～12月にかけて教室に温湿度計を設置し、標本保管に適正な環境であるかを調査した。本講演では、これらの活動の進捗状況について紹介するとともに、高知県や民間団体と共同して進めている事柄についてもお伝えする。

◆総合討論での自然史博物館に関する意見交換 進行役：沖 陽子氏（岡山大学名誉教授）

- 1) 新たな施設建設をしなくても廃校等のリユースで経費圧縮することができることを学んだ。
- 2) 県立の場合、県予算で施設管理費・運営費を賄うことが順序だが、クラウドファンディングの実施も選択肢に入れておく必要はある。
- 3) 開設経費や運営経費は設置に向けたロードマップ

上で欠かせない課題だが、実際に開館見通しが立った時点からの詳細を検討してもよいのではないかな。

- 4) 高知では、2003年設立のNPO四国自然史科学研究センター（高知県須崎市）が、四国各地での調査と交流を継続する中で理解と信頼を育ててきたことが大きい。行政とは、批判や否定はせず対立しないように交渉を続けることが重要と考えている。予算を得るには議会承認が必要となるため、議員とは出来る限り機会を作って懇談を繰り返して、議会で話題としてもらうことを目指している。
- 5) 静岡では、2016年開館まで30年掛かった。2003年にNPO静岡県自然史博物館ネットワークを発足し、県の財産として自然史資料の収集保管・整理が始まった。2008年当時は資料館づくりを目指していたが、2013年に自然系博物館基本構想検討委員会が設置され方向転換した。
- 6) 高知では、2020年夏の標本収蔵家訪問では、一人当たり約1.5時間のヒアリングを行い報告書にまとめたが、その際に訪問先で新たな収蔵家の紹介を受けることが続いた。中には、既に故人となりご家族が保管されているケースもあった。ヒアリングでは、全体の収蔵スペースがどの程度必要となるのかを想定しながら行っていたので、その後の行政担当との規模感の共有と県内施設の選定検討もスムーズに進められた。
- 7) 自然史系博物館がどんな施設か発信する必要がある。高知では、知らない方が多いことを念頭に、バックヤード・ツアー等で博物館ではこんな資料や情報も持っていることを知ってもらう機会も続けている。
- 8) 静岡では、理解のあるトップが在籍している時に様々な施設が開設されてきた。地球環境史ミュージアムでは、心の豊かさや自然の移り変わりや人のくらしの変化などを連続して考えるために博物館の機能を有効に活用した展示を目指している。
- 9) 子ども達がこんなのがあったらいいなという感覚をもってもらえる博物館であることが必要。
- 10) 心の豊かさを考えるとき、次世代に自然の芸術性や豊かさ、気候変動などをデジタルも駆使しながら上手にミュージアムに取り込んでいくが課題となる。
- 11) 岡山で博物館を考える場合、岡山にどんないきものがあるのか、どんな特色があるのか、地域資源をどう生かしてミュージアムに結びつけるのかを検討する必要がある。

- ◆ 日時：2025年11月16日(日)
13時～16時
- ◆ サブタイトル：岡山の貝や植物は？
未来のために楽しく学ぼう
- ◆ 参加人数：18名

◆ 講師 1：福田 宏氏
(岡山大学環境生命自然科学学域准教授)
演題「貝類相の変遷が反映する
岡山県の歴史と風土」

◇ 講演概要

なぜ貝類は、絶滅危惧種が極端に多いのか？
 多様化と特殊化：昆虫に次ぐ種数の多さ＝多様性の高さ
 種が異なれば、環境条件の嗜好もそれぞれ異なる
 移動能力の低さ：環境状態が変化すると死滅するのみ
 著しく狭い範囲（ほんの数mなど）の固有種も多い
 貝類は環境変化に対し、極めて繊細な感受性をもつ
 いわば「炭坑のカナリア」
 炭坑内で有毒ガスが出れば人が気付くより前にカナリアの鳴き声が止むように、環境が悪化すると最初に貝類の種数が減る
 ↓
 環境指標生物として貝類は最も適している
 本来多産する貝類が急激に減る＝その場所は病んでいる

貝類（＝軟体動物）の多くの種は移動・分散能力に乏しく、棲息場所との結びつきが強いことから、他のどの動物の分類群と比べても環境条件の変化の影響を被りやすい。このため貝類は環境指標生物として適しており、特定の地域の貝類相を精査すれば、その地の現状のみならず歴史的経緯の概要をも把握できることが多い。

一方、岡山県では長年にわたって大規模な森林伐採や干拓、水質汚染、海底浚渫などの人為的環境変化がなされてきた結果、貝類の絶滅率（絶滅種÷本来棲息していた種の数）は47都道府県中で最も甚だしい8.64%にのぼり、この数値は大阪府の3.5倍、愛知県の5倍、東京都の9倍以上に相当する。その点で岡山県は、日本でこれまでに生じた環境破壊の縮図とみなしうる重要な地域でもある。

これら岡山県の貝類相の歴史的変遷の実証には過去の産出の証拠（標本や文献記録）が不可欠であるが、それを可能としたのは畠田和一（1897-1965）が遺した標本の存在が最も大きい。畠田は岡山市在住で、1930～1960年代にかけて熱心に貝類蒐集を続け、ハタケダマイマイなど複数の新種の発見に直接関与したことでその名が現在に伝わる著名なアマチュアである。しかし、その生涯をかけて築き上げた歴大な標本群は、彼の歿後長く行方不明となっていた。そのコレクションがようやく再発見されたのは45年後の2010

年秋のことで、鏡野町役場の物置に、誰も価値を判断できないままガラクタ同然に放置されていた。

その前年、岡山県野生生物目録2009に登載された軟体動物の種数合計（後に重複や誤同定と判明したものを除く）は614種であった。ところが、幸運にもほぼ原型通りの状態で見出された畠田コレクションは衝撃的な内訳を示していた。その標本総数は7000ロット以上に達し、それらの産地は日本全国から戦前～戦中の旧日本領のほぼ全域（千島、樺太、沿海州、朝鮮半島、台湾、パラオ、ヤップ、フィリピン、ニューギニアなど）に及ぶのみならず、戦後絶滅した種や、例えば北朝鮮などアクセスが困難となって事実上再入手が不可能な種なども多数含まれる。なかでも彼が地元岡山県で自ら採集した標本には、上記の岡山県野生生物目録2009に挙げられていなかった種が夥しく含まれると判明した。

都道府県ごとの貝類の絶滅種数 (各自治体発行のレッドリストによる)		総種数 (概数)	絶滅率 (絶滅種数÷総種数: %)
岡山県	83 (2025)	961	8.64
東京都	28 (2023)	3000	0.93
大阪府	20 (2014)	800	2.50
千葉県	18 (2019)	3000	0.60
愛知県	12 (2019)	690	1.73
愛媛県	6 (2024)	2300	0.26
兵庫県	3 (2014)	1000	0.30
沖縄県	3 (2017)	3500	0.09

それらすべてを再同定して加味した結果、岡山県で産出が記録された貝類の種数は実に347種増加し、現時点で961種（2009年度版の約1.5倍）となった。この増加分には畠田コレクションとは無関係に新たに見出された種も含まれるが、大半は畠田の遺した標本のみによる。それら畠田標本に見られる岡山県産の種の大半は、その後の本県で産出が一切確認されていない。かろうじて再確認された種もわずかな死殻や破片のみで生貝は見出されていない例が多い。

したがって、畠田が目にしていた当時の岡山県の自然環境は、現在の我々が見ているものとは著しく異なり、両者の間に深い断絶があることは明らかである。畠田が世を去った1965年以降、日本は高度経済成長期に突入し、国土全体で急激な開発がなされて自然環境が一変した史実はもはや繰り返すまでもないが、とりわけ岡山県はその時代の環境悪化の影響が甚大で、それまで県内に棲息していた貝類の多くの種が短期間のうちに絶滅した。その規模はまさに大量絶滅と呼ぶにふさわしい。

その歴史的事実の直接的にして唯一の物的証拠を今に伝えているのが畠田コレクションであり、貴重さ

本日のまとめ

岡山県は貝類の絶滅種数・絶滅率とも日本一

県南部の陸域と海域の環境変質・消失は2000年の長きにわたり、ほぼ全域で生じてきたこれは歴史の長さ・規模の大きさとも日本一

したがって岡山県は、日本一の環境破壊県である海産・陸産貝類相の極端な惨状がこれを証している

淡水産貝類相のみ、今もそこそこ豊富で多様だが、これも安泰では決してない

は計り知れないが、そのような標本群すらも何十年にもわたって放置されていたという経緯はあまりに重い。岡山県はまさしく「日本一の環境破壊県」であるのと同時に、自然史標本の保存と活用においても甚だしい後進県であるという現状を直視すべきである。

◆講師2：片岡 博行氏（重井薬用植物園園長）

演題「倉敷に自然史博物館ができたワケ」

◇講演概要

1. 倉敷市立自然史博物館とは

・1983年11月3日開館。国内では1974年開館の大阪市立自然史博物館に次ぎ二番目に古い「自然史」の名を冠する公立博物館。中四国地方では唯一の「自然史博物館」である。

倉敷に自然史博物館ができたのは…

理由1. 核となる自然史標本コレクション(主に植物と昆虫)が倉敷に元々あったこと。

理由2. 倉敷市庁舎の新築移転(1980年)により、空いた旧庁舎(旧水道局庁舎)の利活用として、何らかの文化施設を整備する方向性が決まっていたこと。

理由3. 自然史博物館の設置構想に賛同し、後押しする人が多くいた(育成されていた)こと。

モノがあり、(空いた)ハコがあり、(理解ある)人が(たくさん)いた。

2. 倉敷に自然史博物館ができた背景

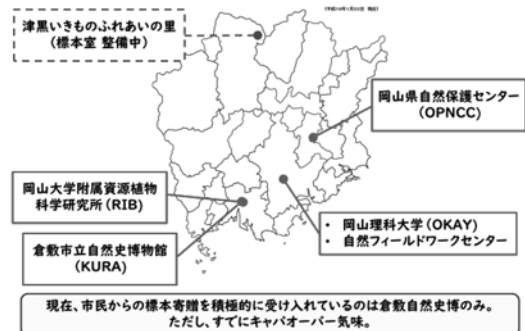
・「岡山博物同好会」(1945年設立)の活動

専門家とアマチュアの交流の場となり、岡山県における自然史研究の基礎を築いた。1951年には所属していた少年たちが中心となり「倉敷昆虫同好会」が設立された。

・博物同好会会員であった重井博による「倉敷昆虫館」の創設

1962年、重井病院内に中四国で初めての自然史系博物館相当施設「倉敷昆虫館」を創設し、倉敷昆虫同好会の事務局も昆虫館に置かれた。重井博

岡山県内の(植物)標本庫



は、重井薬用植物園の設立や総社市のヒイゴ池湿原の保護活動など、様々な活動を行った。

・植物学者、宇野確雄による植物標本コレクション

長年にわたり国内外で採集、あるいは著名な研究者との交流(標本交換)を通じて収集した約5万点に及ぶ植物標本を、1978年に倉敷市へ寄贈(その後しばらく活用されず)。

・倉敷市役所の庁舎移転により空いた旧庁舎の存在

旧水道庁舎の利活用のため、なんらかの文化施設が整備される方針があった(様々な文化施設の拡充・整備が進められていたという時代背景も?)。倉敷市に寄贈されていた宇野コレクションに加え、倉敷昆虫館より寄贈された昆虫標本を基盤として、自然史博物館が設置されることとなった。

3. 標本という「モノ」、利用可能な旧庁舎という「ハコ」、自然史博物館の必要性を理解し設立を後押しした多くの市民や研究者という「人」。これらの三要素が揃ったことが、倉敷市立自然史博物館ができた理由ではないか。

4. 現在の岡山県では、自然史標本収蔵庫の不足、個人所有標本の散逸、若い世代の自然体験の機会の減少・関心低下、自然に強い関心を持つ世代の高齢化など課題が山積している。大学などで保管されている標本も、組織や施設の統廃合などがあれば安泰ではない。

「自然史冬の時代」に備えて

- ・倉敷市立自然史博物館は、「モノ」・「ハコ」・「人」がそろっていたからこそ誕生した。
- ・現状、ハコをすぐに用意することは難しいかもしれないが、モノと人の準備は可能かも。
- ・冬の時代だからこそ、どこかで保管されているモノが危機的状況になる可能性も高い。その際に救いの手を差し伸べられるようにしておこう。
- ・自然好き(自然史好き、生き物好き)の人口は減少するかもしれないが、自然好きな人が減らない(増える)ような活動・機会の提供は重要。各地の自然観察会、自然保護活動にできるだけ多くの人を巻き込もう。

5. 私個人としては、近い将来、「自然史冬の時代」がやってくると予測。だからといってあきらめるのではなく、起こることを予測し、ハコがなくとも、「モノ」をまもり、「人」を育てることが重要であると考える。

◆総合討論での自然史博物館に関する意見交換
進行役：小林 秀司氏（岡山理科大学教授）

- 1) 岡山にも淡水貝類の貴重な種がいくつか棲息している。岡山に自然史系博物館の設置を求める積極的な理由として、まだ地域的な生物学的な必然性を提示できることは重要。
- 2) 県内で調査研究して収集した標本や書籍も、退官時には引き続いてもらえそうになく、まとめて県外施設に寄贈して末永く保管してもらおうことを想定している。
- 3) 例え岡山に収蔵庫があったとしてもそれを同定できる研究者が存在しなければ価値がない。畠田コレクションでさえ対応に苦労している状況。
- 4) 博物館が設置されたら様々な標本の学術的な研究や活用が進むと考えるのは誤りで、一人の学芸員が研究している分野はかなり狭く、博物館外の研究者が来訪して活用することに留まる。
- 5) 生息域外保全をメインに取り組んでいる施設は、県内には民営の重井薬用植物園以外にない。
- 6) 県自然保護センターの設立に尽力された方々はオーソドックスな生態学をメインとされており、連綿と続く歴史の回廊を凝縮したような施設である博物館的な研究の流れに必ずしも精通していたわけではなかったことが、当時は自然史博物館の必要性を重要視されなかったのではないかと。
- 7) 当時既に倉敷市立自然史博物館があったので、それよりも自然を保護するとはどういうことかを学べる施設が必要だと考えられ、県自然保護センターが整備されたのではないかと。ただその当初の意図を汲んで自然の保護について学ぶ施設として運営されているかどうかは疑問もある。岡山県に自然教育を行う施設はなく、それを県自然保護センターが担っていると理解することもできる。
- 8) 自然保護を優先した公営施設がないので、自然保護をする施設を併設した自然史博物館の機能をもった施設にニーズがあるのではないかと。
- 9) 収蔵されている資料を活用して研究をした経験がなければ、博物館の本質を理解することは困難ではないかと。
- 10) 最終的な同定をするためには、重箱の隅をつつくような作業を地道に行える分類学者が絶対に必要。ただし、分類学は教育（人材育成）できない。

できない人に懇切丁寧に教えてもできない。できる人は教えなくてもできる。DNA解析をする人は、同定はできない。

- 11) 大学教員だと講義・実習・教授会・ゼミ生対応・卒研対応・マネジメントに追われ、収集した提供を受けた標本の管理は、業務の一番後回しとなり、殆ど手が回らず、退職後にするしかないと考えている。
- 12) 市民としては、実物標本を展示する自然史博物館、市民や子どもたちが学問に触れる機会が失われてきている。研究者と市民をつなぐ場としての自然史博物館の必要性を感じる。
- 13) 生物多様性の劇的な低下が進行している中で、分類学者は野戦病院状態で、瀕死の種が運ばれてくるのに目の前でどんどん絶命しているような状況に手を差し伸べることもできないような状況になっている。
- 14) 大英博物館でも人気のない展示物についての予算が削減されている。アメリカでも同様な動きになるのは予想できる。岡山だけではない。どんな環境になっても、あきらめずに信念をもって取り組んでいくことは必要。
- 15) 「森のようちえん」や「風の谷プロジェクト」という活動がある。絶望の中から未来を生きていくことを意識しようとしている点では、参考となるのではないかと。

◆ 日時：2025年12月13日(土)
13時～16時

◆ サブタイトル：岡山の鳥や昆虫は？
未来のために楽しく学ぼう

◆ 参加人数：22名

◆ 講師1：丸山 健司氏
(日本野鳥の会岡山支部支部長)
演題「日本野鳥の会岡山県支部の
自然保護と自然啓蒙活動について」

岡山県の野鳥の会について

日本野鳥の会岡山県支部は2027年5月に創立50周年を迎えます。この50年間の支部活動を通して「岡山に自然史博物館を！」の思いを皆さんと共有できればと思います。

岡山県における「野鳥の会」について

その前に岡山県における「野鳥」を語る上で語らなくてはならない方が

「川村 多実二 先生」(1883生)です。

京都大学にて動物学教室で助教授の時、コーネル大学で野外実習に影響を受け、帰国後、動物生態学を講義、中でも有名なものが「鳥の歌の科学」(1947年)が有名



◇講演概要

日本野鳥の会岡山県支部は2027年に創立50周年を迎える。

この50年間行ってきた支部活動を通して「岡山に自然史博物館」への思いを皆さんと共有したい。

まずは、岡山県における「野鳥の会」存在について。岡山県の野鳥を語る上であげなくてはならないのは「川村 多実二先生」である。川村先生の影響を強く受けて設立されたのが「作州野鳥の会」。初代会長井上 立先生は「川村先生が津山の来られた折は夜中まで話し込みました。」と話されていた。こうした野鳥の会が県内には9団体（内3団体は活動が不明）あり、それぞれ各地域で野鳥を通して活動している。

①作州野鳥の会（1974年設立 会員約50人）、②落合野鳥の会（1974年設立 会員約80人）、③高粱野鳥の会（1998年設立 会員約40人）、④笠岡野鳥の会（1997年設立 会員約50人）⑤日本鳥類保護連盟岡山県支部（詳細不明）⑥日本野鳥の会岡山県支部（1978年設立 会員約500人）以下は活動状況不明：⑦倉敷野鳥の会（1972年設立）⑧勝山野鳥の会、⑨東備野鳥の会である。さらには岡山県自然保護センター 友の会や倉敷市自然史博物館友の会などが探鳥会を開催して地域の皆さんに野鳥と出会う機会を提供している。野鳥を通して自然の素晴らしさに感動し、自然を大切にすることが育って欲しい。

錦海塩田跡地サンクチュアリ計画

1982年錦海塩業(株)の所有地であった塩田跡地の鳥類調査実施
 ・3年間岡山大学野鳥の会と塩田跡地の鳥類調査を実施
 ・錦海塩業(株)と塩田跡地サンクチュアリ計画について協議:会社の同意得られず。



さて、岡山県支部の保護活動について少しお伝えする。

- ・支部設立の1978年9月から「鹿居島サンクチュアリ計画」の調査に入る。
- ・1979年 鹿久居島は国設の鳥獣保護区に指定
- ・1979年 県内のシギ・チドリ類の調査を開始
- ・1980年 県内のガン・カモ調査を開始（現在に至る）
- ・1982年 県内のヤマセミ生息状況調査を開始
- ・1982年「錦海塩田跡地サンクチュアリ計画」の基礎調査を開始
- ・1984年 岡山市に「阿部池サンクチュアリ建設」要望書提出
- ・1986年 県内のサギ類生息状況調査を開始

- ・1988年 県内のブッポウソウ生息状況調査を開始
 - ・1990年 加茂川町でブッポウソウ巣箱設置を開始
 - ・1992年 県内のケリ生息分布調査を開始
 - ・1994年 5月「県の鳥」がホトトギスからキジに変更
 - ・1996年 県内のオオルリ生息状況調査を開始
 - ・2006年 錦海塩田跡地埋め立て問題に取り組む⇒メガソーラー問題へと展開
 - ・2008年 津山市五輪原の大規模風力発電所問題で鳥類調査を開始、反対運動を開始
 - ・2022年 鏡野町大規模風力発電所計画に対する鳥類調査を開始、建設反対運動に参画
 - ・2022年 笠岡湾干拓地の寺間遊水池への太陽光発電パネル設置反対活動を実施 等々
- 岡山に自然史博物館を考える。（最近見た鳥取県の氷ノ山ビジターセンター）

岡山に自然史博物館を……！

その昔のお話……

その1:岡山操車場跡地の利用として博物館を……

「岡山の自然を守る会」が提唱し運動したが、同じころ

「林原自然科学博物館」構想があり岡山に博物館二つは足りない

その2:児島湖浚渫工事が始まったころ、児島湖周辺の自然観察

拠点として、岡山自動車免許センター跡地に博物館を！の運動

が有ったが、県は住宅地として販売してしまった。

その3:今回のお話になる。

◆講師2：難波 由城雄氏（生物生態写真映像作家）

演題「雅なクモ ジョロウクモの一生」

◇講演概要

長女が生まれた年の11月、我が家の庭で偶然ジョロウグモの産卵を見た。全身の力をふり絞るような産卵。休む間もない糸かぶせとカモフラージュ、そして卵のうを守りながら力尽きて死んでいった。母グモ、その姿を見た時、私は言葉では言い表せない程の感動を覚えた。この感動が、ジョロウグモを撮影する引き金となった。人生の目標を見つけた25歳であった。

最初の数年間は、産卵のみを撮影した。やっと撮れるようになると、次にクモはどんな生き方をしているのか生態に興味を持った。その頃、私の師匠となる写真家の栗林慧氏とひょんなことから出会った。栗林氏



ジョロウグモの産卵

の紹介で偕成社からカラー自然シリーズ「ジョロウグモ」を出版することができた。5年後に韓国、次の年にインドネシアでも出版。39歳の快挙であった。

それから後楽園をパノラマカメラで撮影した。気が付けば後楽園も25年間撮影し、それなりの成果を得た。そして作品としてはこれ以上のものを撮ることはできないと見切りをつけた。私は還暦も過ぎ、64歳になっていた。

最後の仕事として、ジョロウグモや昆虫を動画で記録するとどうだろうと考え、写真から動画に舵をきった。70の手習いとして編集に特化し、パソコンも手に入れた。動画を始めて10年、脳の下部に腫瘍が見つかった。これを機に仕事を辞め、動画に専念した。

まず手始めとして、縮切が手術日と一日違いのコンテストに応募し、天命を待った。手術後、腫瘍は良性と判明、2ヵ月後第64回科学技術映像祭において、文部科学大臣賞受賞のメールが届いた。語りは家内、夫唱婦随の作品であり、喜びはひとしおであった。

約半世紀に渡り記録したデータが、このままでは消滅してしまう。私のみならず、他の写真家の方々も同様であると思う。

この貴重なデータを次世代に渡し、自然史博物館で展示、保存できることを切に願う。是非、岡山市内に自然史博物館の新設を望む。



ササグモ



アズチグモ

◆総合討論での自然史博物館に関する意見交換
進行役：藤崎 憲治氏（京都大学名誉教授）

1) J1 ファジアーノ岡山のスタジアム建設で50万人の署名を集めて、自然史博物館の設置は、難しいと

は思う。ただ鳥取県立博物館が、25年5月の改装で自然史、歴史、民俗、美術工芸の総合博物館になった。岡山でも歴史博物館の一角を改装する検討はできるのではないかと。自然史博物館に特化してしまうと、運営も厳しいのではないかと。

2) 投資する金額以上のもの、お金には代えられないものを、将来の子どもたち・孫たちのために残していくことが必要。子どもたちが外で遊ぶ機会も減っている中で、それを打破する役割を担うことを期待したい。

3) タブレットでYoutubeを見ながら虫の絵を描くことが当たり前になりつつあり、自然体験がなさ過ぎて自然の中で五感を鍛える経験もない。次世代の子どもに接する機会が多い学生に、自然に接する機会を作っていくことも教育者の責務ではないか。自然が好きという学生もいるが、両親やその周りの者に自然の中に連れて行かれたという経験がある。家庭教育も大切だと考える。

4) 岡山には歴史もあり、自然も大切にされていることを総合的に捉えるものとして、シチズン・サイエンスを発揮できるようにしたい。

5) 県内には自然保護に取り組んでいる方々がたくさんいるので、自然史博物館ができれば、保全をされている方々やつやま自然のふしぎ館などの地方ともつながるネットワークを作ってもらいたい。

6) 倉敷市立自然史博物館の企画に参加していた子どもの中には昆虫学者になった子どもたちもいるそう。子どもたちが自然に目を向けてもらえるようにするためにも博物館が必要。

7) ふじのくに地球環境史ミュージアム（前々回学習会報告）は廃校活用してハード面の経費削減を行っているが、ソフト面でのプログラム開発に力を入れている。

8) 博物館と生の自然は相反するものではなく、相互補完する関係になれば、新しい発見の場にも、より深く生態系を理解する場にも、自然の利活用を考えられる場にもなる。

◆ 日時：2026年01月25日(日)
13時～16時

◆ サブタイトル：水辺の動物たちは？
自然史博物館でどう変わるの？

◆ 参加人数：26名

◆ 講師1：中田 和義氏

(岡山大学環境生命自然科学学域教授：

応用生態学分野)

演題「岡山の水辺で何が起きているのか？
—絶滅危惧種と外来種から見る
水生動物の現状—」

◇講演概要

岡山で淡水魚の種数が多い理由は？

- 一級河川が3本もある。
- 農業水路網が発達している。
- 冬期間も水路の水涸れが発生しない。

春の訪れとともに、岡山の田んぼではカエル類の合唱が始まり、水路や川では淡水魚が生命力あふれる動きを見せる。そこに姿を現すのは、トノサマガエルやオイカワなどのよく知られた種はもちろんのこと、国内希少野生動植物種のスイゲンゼニタナゴやアユモドキ、絶滅危惧種であるナゴヤダルマガエルといった全国的にも重要な種を含んでいる。

このような日常的な風景そのものが、岡山が淡水魚の種数において全国トップクラスに位置づけられる地域であることを物語っている。

一方で、岡山の水辺では外来種の侵入・定着が着実に進んでいる。近年、スイゲンゼニタナゴの生息域において、国外外来種のタナゴ類2種および国内外来種であるカゼトゲタナゴとの交雑個体由来する「外来タナゴ類」が確認されている。その分布は年々拡大しており、さらにスイゲンゼニタナゴとの交雑個体も確認されていることから、本種の存続に深刻な影響が及ぶ段階にある。

また、岡山を含む全国的に定着しているアメリカザリガニは、在来生物（両生類・水生昆虫・水生植物など）への被害に加え、巣穴による水田漏水や稲茎の切断などの農業被害が問題となっている。このため、アメリカザリガニは、2023年6月1日に「条件付特定外来生物」

に指定され、野外への放流や有償での販売等が規制され、全国各地で防除が進められている。

さらに岡山県では、平成30年7月豪雨により倉敷市真備町のナゴヤダルマガエルの主要生息地が広域に浸水し、個体群への深刻な影響が懸念された。

以上を踏まえ、本講演では、演者の研究室（岡山大学応用生態学研究室）で得られた研究成果にもとづき、次の内容を紹介する。

- (1) 倉敷市真備町における平成30年7月豪雨後のナゴヤダルマガエルの個体数回復過程と現状
- (2) スイゲンゼニタナゴの現状と外来タナゴ類の問題
- (3) アメリカザリガニの基礎生態とその対策

新たな北米産の外来ザリガニ

ミステリークレイフィッシュ



- 単為生殖が可能（1匹だけで繁殖できる！）
 - 生まれてから繁殖可能になるまでの期間が短い
 - 抱卵数は最大で700個以上に及ぶ
- かなり危険な外来種！！

◆講師2：狩山 俊悟氏

（元倉敷市立自然史博物館学芸員）
演題「倉敷市立自然史博物館

開館から42年の歩み」

◇講演概要

自然史博物館は運営主体や基本理念、学芸スタッフの専門性などにより、活動内容はまちまちである。倉敷市立自然史博物館の活動を一例に、自然史博物館の役割や可能性を探りたい。

1. 倉敷市立自然史博物館の基本情報

倉敷市立自然史博物館は、①地域に根ざした博物

まとめ

H30年7月豪雨から3年が経過し、
真備町のナゴヤダルマガエル個体群は回復傾向へ

～2021年10月のナゴヤダルマガエル捕獲調査の結果～

- 116匹のナゴヤダルマガエルが捕獲され、豪雨発生前の水準まで個体数が回復した
- 捕獲された個体の90%以上が、2021年生まれの若い個体であった

自然災害の影響により減少したナゴヤダルマガエルの個体群は、回復までに数世代かかる！

2019年に営農活動が再開されたことが、
生息地復元にとって重要

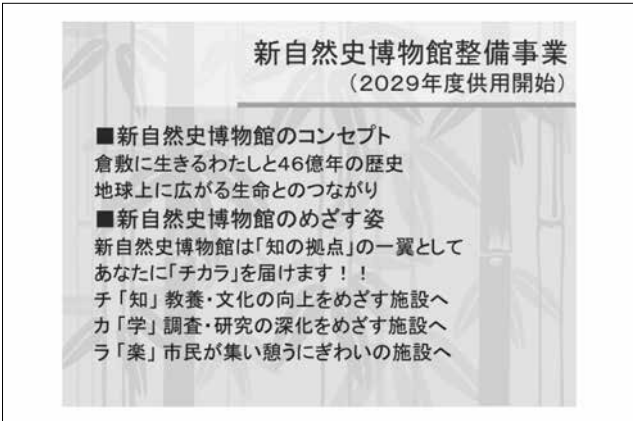
中～長期のモニタリングを通して保全策を検討する必要

自然史博物館基本構想

- 地域に根ざした博物館
岡山県南部の平野を形成し、文化を育てた母なる川、高梁川の流域と瀬戸内海の内海を自然史的に表し、市民が郷土の自然を愛し、自然に親しむ心が芽生える博物館
- 特徴のある博物館
数多くの資料を有する昆虫、植物については、特に掘り下げた表現によって、自然のしくみの神秘さ、すばらしさを紹介するユニークな博物館
- 開かれた博物館
市民と共に歩み、市民に支えられたみんなの博物館。すべての人が楽しく観覧し、気楽に対話のできる博物館
- 学問に裏づけられた博物館
単なる展示を排し、研究と学問に裏づけられた常に前進する博物館

館、②特徴のある博物館、③開かれた博物館、④学問に裏づけられた博物館を基本コンセプトに1983年11月3日に開館した。開館20年を機に2003年から4年かけて常設展示室を順次全面リニューアルし、2018年には運営方針ならびに資料収集方針を公表した。現在、2029年度の開館を目指して新自然史博物館整備事業に取り組んでいる。

2. 倉敷市立自然史博物館の事業



・資料収集保管事業

2021年度に地学・生物標本の受入点数が100万点を超え、西日本有数の収蔵点数を誇る。受入標本の93%は寄贈で、多くの方に支えられている。収蔵標本の増加に伴い、本館に収蔵しきれない標本は館外の仮収蔵施設に保管している。

・調査研究事業

機関研究…博物館がその設置目標を達成するために必要と考えられる調査研究
 個人研究…博物館の理念・活動目標の中で各学芸員が研究テーマを設定
 共同研究…一定のテーマについて外部の専門家やアマチュアとともに調査研究

・展示事業

常設展示とは別に、特別展示室を使って期間やテーマを変えながら特別展、特別陳列などを年数回開催している。他館に標本の貸出しも行っている。

・教育普及事業

野外では自然観察会を中心に実施し、館内では各種講座や教室などを行っている。春と秋には大型イベントを実施し、ふだんは博物館に縁のない多数の来館者が訪れる。博物館の理解者を増やすために博物館実習生や職場体験学習を受け入れている。

・新自然史博物館整備事業

水島地区のライフパーク倉敷に移転し、既存の市民学習センター、科学センター及び埋蔵文化財センターと、新自然史博物館を一体的に整備する計画が進行中。

3. 自然史系博物館界の最近の動き

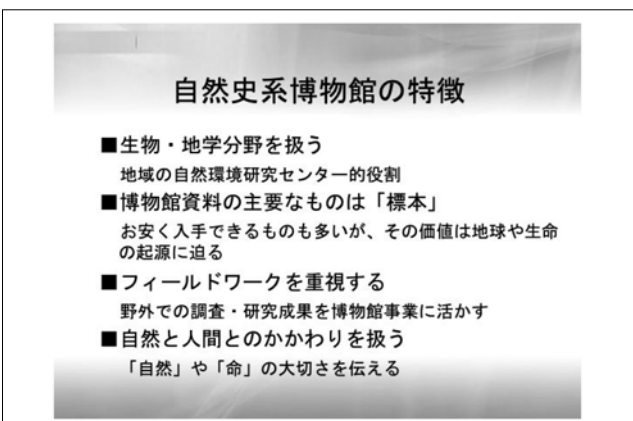
博物館連携、標本情報の公開と共有、標本救済ネットの運用など。2023年4月には博物館法が改正され、博物館の担う役割が見直されつつある。

時間があれば、西日本自然史系博物館ネットワーク、サイエンスミュージアムネット、標本救済ネット、標本レスキューについて触れる。

◆総合討論での自然史博物館に関する意見交換

進行役：沖 陽子氏（岡山大学名誉教授）

- 1) 岡山の三大河川では地域絶滅せず生き延びている種が多いと考えている。
- 2) ミステリークレイフィッシュ（単為生殖・外来種）や外来タナゴ類、カダヤシ（特定外来生物）などの具体的な見分け方を普及啓発していくことは重要。
- 3) 学生が県内で発見し論文にもなった外形貝形虫については、証拠になる標本は琵琶湖博物館に登録してもらった。研究上重要な標本の中には、兵庫県立人と自然の博物館に登録してもらうこともある。倉敷市立自然史博物館に依頼する場合もあるが、県内で保管できる施設があればいい。
- 4) 種を絶滅させないこと、そのためには外来種を新たに放さないことが重要。絶滅危惧種を県内外から実際に捕獲に来る人、販売しようとする人がいる。密猟を防ぐために地域での監視の目が重要。
- 5) スライドやDVDのデータは、いつ・どこで・誰が・何を撮影したものが明確になったものが博物館資料としては重要。
- 6) デジタル化したものは目に見えていないもので一瞬にして消失する可能性もありバックアップやサーバー保管、公共施設での保管セキュリティなど課題が多い。
- 7) 絶滅判定は過去50年間生育・棲息・目撃情報がないことを基準としているが、近年新たに採取した標本を収蔵するスペースもなく、特に普通種は収集されることも少なく、標本情報だけでは過去50年の存在を十分反映されなくなる恐れが出ている。それを補完するために写真情報、文献情報、部会メン



バーの調査記録を併せて情報収集していくことを岡山県野生動植物調査検討会植物部会では協議を始めている。

- 8) 大学で研究と標本収集している立場と博物館との連携を図る必要性を理解した学芸員資格を持った大学教員がいることで、博物館が町のシチズン・サイエンスの拠点となることに期待する。
- 9) 正規の学芸員を追加雇用することが非常に厳しい。自然史系博物館の場合、収集活動、標本整理、展示作業・解説にもボランティアが携わっている。そのことでボランティアの満足感にもつながり、多くの人が関わることで博物館全体を盛り上げることにもつながっている。
- 10) 倉敷市立自然史博物館の移転について、他施設との複合化と博物館面積は拡大しないなどという条件がある。可動式収蔵棚とすることで収蔵量は若干増やせることを期待している。
- 11) 動植物の標本には、文化財に匹敵するような自然財という定義づけはされていない。タイプ標本は国宝と同等だと考えるが、文化庁管理ではなく個人管理されているケースもある。
- 12) 今後DNA解析等の新しい学問の進展を想定する必要もある。保存できるものは保存しておくために、地方の博物館でそのエリア内の普通種を含めた分布状況が分かる標本収集を各地の博物館が連携して取り組むことが重要。倉敷市立自然史博物館では、普通種博物館を目指してきた。
- 13) 例えばスイゲンゼニタナゴを岡山市内で飼育展示している場所がない。県民にとって非常に重要ないきものであるにもかかわらず、生体を一般市民が見学できる施設がない。滋賀県立琵琶湖博物館は参考になる。人工繁殖個体なら、展示も可能かも。
- 14) 生活と自然が密接にかかわっていることをリアルな形で伝えられる方法の一つとして展示をとらえることが必要。DNA解析した結果、これまでと異なる分類等（地域変異含む）になる場合でも、そのことを市民に伝えられることも博物館には求められる。
- 15) 野鳥の場合、野鳥のはく製だけでなくカービングという手段もある。子どもたちに理解してもらうためにも見てもらえるツールが揃った博物館が必要。
- 16) 岡山の特色として、三大河川～児島湾(湖)～瀬戸内海があり、そこに岡山の文化が育ってきた。地学的にも面白いものもある。これらをひとまとめに展示することができる。

自然とくらし部会で訪問した 県内外の自然史系博物館

2025年度も、県内外の自然史系博物館を訪問しました。ご多忙の中、学芸員の皆様に設立経過や大切にしていること、来館者に伝えたいことをお伺いするとともに、複数の博物館では収蔵庫もご案内いただきました。

誌面の都合上、事務局で聞き取った内容を中心にご紹介致します。みなさんも是非訪問をご検討下さい。

高知県立牧野植物園

(視察：06月08日)

- 収蔵：約30万点（1999植物標本館設立、50万点まで収蔵可能）。書籍等約5.8万点（牧野文庫：牧野博士の蔵書・遺品）。標本は腊葉標本or液浸標本で保管。五台山以外にハウス（長江圃場）で希少種&貴重種の育成管理（南海地震に備え五台山への移動計画中）。他に東京都立大に牧野標本館（藻類・コケ・シダ・裸子・被子植物など約50万点：標本貸出はデジタル画像or展示用標本）。
- ミッション：1) 植物多様性研究の解析と保全、薬用資源植物の開発を主題とした研究。2) 植物と人間生活のかかわりを主題とした教育の普及。3) 魅力的な植物の展示を通じた憩いの場の提供。
牧野植物園磨き上げ整備基本構想：「世界に誇れる総合植物園」としてポテンシャルを最大限発揮し魅力を高めるため磨き上げを実施する。1) 県民の誇りの拠点。2) 知の拠点。3) 宝の人材を育成する拠点。
- 研究：1) 植物多様性の解析（高知県、ミャンマーなど）。2) 高知県での希少植物の調査と保全（分布調査・生育地以外での保全・食害帽子対策）。3) 薬用資源植物の開発（海外産植物からの有用活性物質の探索・漢薬原料植物の栽培）。
- 教育普及：1) 展示（企画展示・常設展示のリニューアル・季節の植物展示・植物教室）。2) 学校教育支援（学習支援・教育プログラムの開発と実践）。3) 牧野文庫（資料デジタル化・牧野文庫の活用）。

滋賀県琵琶湖博物館

(視察：09月13日)

- 収蔵：約150万点（登録資料約73万点→DB公開、地階収蔵庫も10年程度で一杯に）。地階に書庫（資料貸出なし・有料コピーサービス提供）。
- 基本理念：1) テーマをもった博物館（「湖と人間」というテーマにそって未知の世界を研究し成長・発展する博物館：総合性を保つことで訪れるたびに新たな発見ができ繰り返し訪れたいような動き

と楽しみのある博物館の基礎的な活動を保証)、2) フィールドへの誘いとなる博物館 (魅力ある地域への入口としてフィールドへの誘いの場となる博物館:「魅力的な発見や創造はフィールドから生まれる」という理念)、3) 交流の場としての博物館 (多くの人びとによる幅広い利活用と交流を大切にする博物館:展示や交流・サービス活動、研究・調査活動などの博物館活動にかかわり楽しみながら学び考え出会いの場となるような～中略～人、物、情報が交流する場をめざす)。

- 活動方針:利用者との間で知識や情報を交換し、語り合う場を用意することで、たえず成長・発展する博物館をめざし、次のような事業を展開する。1) 研究・調査 (博物館活動の根幹、琵琶湖周辺立地の研究機関や大学・世界各地の湖沼研究機関とのネットワーク)、2) 交流・サービス (「はしかけ」や「フィールドレポーター」などの利用者参加制度の運営)、3) 資料整備 (琵琶湖とその週水域および淀川流域をはじめとする自然と文化にかかわる物や情報といった資料の体系的収集・整理)、4) 情報 (琵琶湖を中心に国内外の湖沼に関する知識や情報を集積・蓄積し体系的に分析・整理)、5) 展示 (常設展示だけでなく企画展示や移動展示を含めわかりやすく・親しみのある・楽しめる展示を創意工夫する)。
- フィールドレポーター:地域の方が滋賀県内の自然や暮らしについて、身の回りで調査を行い、その結果を定期的に博物館に報告していただく「地域学芸

員」のようなもの。今後はIT活用したい。世代交代が課題。任期1年で更新あり。

あかいわ地球史研究所 (視察:12月20日)

- 解説:①P T境界:リーフギャップ&チャートギャップ&石炭ギャップが約1,000万年間続く、②1mm堆積/1万年、12cm浸食/1万年、日本海改進2,000～1,500万年前、③ペルム紀(古生代3.0億年～2.5億年前:パンゲアとテチス海とパンタラッサ海)、④ペルム紀末の生物大量絶滅(属の78～74%・種の96%が絶滅):超大陸の形成・シベリア洪水玄武岩・スーパーアノキシア・海水準の変化・巨大隕石の落下、⑤ペルム紀での変化:生物で羊膜が出現(哺乳類・鳥類・爬虫類)・植物で胚珠が出現(裸子植物・被子植物)、⑥ペルム紀と三畳紀(中生代2.5億年～2.0億年前)の動植物の違い、⑦周匝周辺の地層紹介(P T境界:月の輪古墳東に延びる尾根地形上部、周匝のペルム紀地層、舞鶴層群、吉備高原:3,400万年前の安定地層、和気カルデラ:8,000～7,300万年前、など)
- 地層見学:①城南小学校東:砂岩泥岩互層・互層に貫入する花崗斑岩・褶曲、②吉井支所裏:P T境界(美咲町王子:吉野川から約150m標高差のある高さで水平方向)の遠望、③美作市英田尾谷&英田谷口:泥岩・貝殻化石、④草生多目的広場:古第三紀のレキ岩露頭、⑤城山天守閣:P T境界の遠望・吉備高原・火山地形

ニュースへのチラシ等の同封物に関するお知らせ

おかやま環境ネットワークで会員の皆様にニュースを発行しています。ここに、会員団体の各種イベントのチラシ等を同封することができます。

同封希望がありましたら、発行前月の第2週末までに事務局へご連絡ください。

※メールニュースは毎月第2・4水曜日を基本に発行しています。メールニュースへ掲載希望がありましたら、毎月第2・4月曜日までに原稿を事務局に送信ください。

※特に「助成団体の対象事業」に関しては、より広くお知らせをしたいと考えていますので、是非ご連絡ください。

メールニュース配信希望者募集中

おかやま環境ネットワークの情報や、

会員団体のイベント情報等を掲載しています。

配信をご希望の方は、メールにて件名:「メールニュース配信希望」とし、メールアドレス・お名前(必須)、連絡先・所属団体・会社名(任意)をメール文にご記入の上で、右記事務局アドレスまで送信ください。

現在1,200名強のみなさんにご登録いただいています。

個人・団体・企業 会員募集中

おかやま環境ネットワークは、皆様からの会費、寄附、ボランティア活動で支えられています。ぜひ会員となり、活動をご支援ください。

【年会費】

- 個人・団体: 2,000円
- 企業等: 20,000円
- 大学生・大学院生・高校生: 無料

2026年度の会費納入に向け、振込用紙を同封しております。主旨をご理解の上、お振込みくださいますようお願いいたします(入れ違いでお振り込みいただいておりますらご容赦ください)。
会費は、企業・協同組合:1口2万円、団体・NPO法人・個人:1口2千円、1口以上をお願いいたします。



発行:公益財団法人おかやま環境ネットワーク

〒700-0026
岡山市北区奉還町1-7-7(オルガ6階)
FAX:086-256-2565
携帯電話:070-2355-1420
E-mail:kankyounet@okayama.coop
HP:https://okayama.coop/kankyounet/
Facebook:公益財団法人おかやま環境ネットワーク

